附属図書館100周年

「『静脩』総目次」を読む①

“私たちは、京都大学の図書館を、大学における教育・研究活動に対する＜支援機構＞であると自ら規定しております。”（※１）との図書館の位置をあらわす言葉が、館報『静脩』に見られる。

図書館、とりわけ大学図書館の在り方・理念を考え、深化させる上での重要な要素に、利用者の要望や期待をどのように捉え、生かしていくのか、ということがひとつめにあげられるが、この場合京都大学附属図書館では図書館側と利用者側とのコミュニケーションの媒体として創刊・刊行された『静脩』があり、したがって『静脩』がその役割を充分担ってきたかについて検討することが必要だと思われる。「『静脩』総目次」を通して見るかぎりでは、この点においてはむしろ不充分ではなかったかという印象が強い。

確かに充分な時期もあった。それは、全国をあげて大学の改革が叫ばれた1968年から1970年にかけてのことであった。京都大学でも大学改革が大きく浮上し、その中で附属図書館の改革問題も例外ではなかった。従って、附属図書館への要望を含め改革の「声」が『静脩』の誌面を埋めており、その中には“昔の資料を調べてみると、今やればよいと思うことは大抵出てくるわけです。”（※２）との言葉通り、附属図書館の建物構想や運営構想に関わる基本的で貴重な改革構想がしめされていたといってよい。

ふたつめに、在り方・理念を構築し、実現していくものとして、大学には「図書館商議会」がある。“附属図書館商議員会を、そうした理念を語る場としたい。”（※３）との表現通り、「附属図書館商議会」は図書館職員や利用者の要望・期待を反映し、大学図書館の将来的発展に、あるいは現実の課題解決にその役割を果たす組織であるが、こうした認識の一方で、“学内には附属図書館及び大学の図書館の在り方を議論する商議会という場はあるが、最も肝心な図書購入費の厳しいもとでは、むなしい議論となることが避けられない。”（※４）といった悲嘆とでもいうべき、現状からくる対極の認識もひとり京都大学のみではなく各大学共通のものとして存在する。こうした状況のもとでは、大学図書館の活性化と地位の確立・向上を期するどころか、むしろその位置の長期低落傾向に歯止めがかからず、否、さらに加速していくのではないかとの危惧さえ持つ。

だとするならば、図書館職員や利用者の「声」と図書館側との思いが一致する方向で課題の整理が行われ、施策の充実を期する努力がいっそう必要になってくるわけだが、そのためにも、「声」に対する新たな視点が『静脩』の編集に求められているのではないだろうか。

※１ 高村　仁一
「式辞」『静脩』号外（1984年4月）
※２ 西原　　宏
「大学図書館の使命について」『静脩』Vol.21. No.2（1985年3月）
※３ 戒能　通厚
「名古屋大学附属図書館の将来―いかにあるべきか・ひとつ の提案―『館燈 名古屋大学附属図書館報』 No.128（1998年8月15日）
※４ 木村　磐根
「附属図書館商議員の役割」『静脩』Vol.32. No.4（1996年3月）

（人文科学研究所図書室　　松田　博）